

「提言書」～持続可能な医療提供体制とは何か、見直す時期にきている

(1) 診療のあり方 (2) 経営改善の方策 (3) 経営形態の見直しについて提言。同規模病院である上野原市立病院では、常勤職員と非常勤・賃金職員（常勤換算）で「当院よりも43.9名少ない人員で運営されている」と指摘。経営形態は成功事例にならない、「指定管理者制度（公設民営）を第一候補として検討することが望ましい」。

	大月市立中央病院	上野原市立病院	
稼働病床	128床	135床	
常勤医	11人	15人	
非常勤医（常勤換算）	11.46人	4.5人	
看護部門	96人	91.1人	
総数	205.5人	161.6人	2017.4
人件費比率（注）	88.4%	66.8%	比較

（注）人件費／医業収益×100 人件費は、非常勤職員賃金、職員法定福利費等ふくむ

佐藤二郎院長のお話（1月18日議員定例懇談会）

東京女子医大との関連病院協定更新が厳しくなっていることもふくめ、抜本的な病院改革が必要であり、経営形態の見直しについて検討してきました。「提言書」にそって、まず指定管理者制度を検討しましたが、現時点では応需の可能性は低く、現に打診した医療施設からは交渉に入ることも断られました。病院を存続させていくためには、常勤医師確保においても経営健全化においても、院長自身の決断が求められており、腹を固めました。そこで、現場の混乱を避け、かつスピード感をもった経営形態の見直しが可能な地方独立行政法人（非公務員）に移行させたいと思います。これによって、医師をはじめ職員に成果に見合った給与を支払うことができ、常勤医師確保も有利になります。また業務の効率化による経費削減や職員数の適正化がすすめられます。今後、経営の改善を図りつつ、身の丈に合った医療の展開、地域の医療需要にこたえる地域包括ケアシステム構築では役割を果たしていく考えです。

石井由己雄市長のお話（2018年3月市議会定例会での所信）

厳しい経営状況が続く市立中央病院が経営健全化を図るには、経営形態の見直しが必要であり、その形態は公設公営の経営形態を保ちつつ、病院改革を断行できる「非公務員型の地方独立行政法人」へ移行することが最善の策であるとの結論に至り、その準備を進めているところであります。

市立中央病院が地方独立行政法人に移行したとしても、これからも市立病院として、良質な医療の提供により、市民の皆様信頼される病院をめざすことに変わりはありませんので、ご安心いただきたいと思います。



大月市議会

2017年9月～2018年6月
市立中央病院改革特集



一般質問（6月定例会）

中央病院運営委員会が2017年7月、経営形態の見直しを含む改革提言書を市長に提出。検討を重ねた結果、市および中央病院は地方独立行政法人に経営形態を見直す方針を示しました。私は病院を存続させるため、「この機をいかすべきだ」と賛成する立場を明らかにしました。

独法化とは…

地方独立行政法人（非公務員型）は、市が100%出資する公設公営を維持しつつ、市長が任命する理事長が独立した法人の長として、市から独立した経営権限を有し、自立性の高い運営を可能とする組織。新法人は現在の病院事業を引き続き行うため、当該職員は異動辞令や派遣辞令がない限り、自動的に法人の職員となる。なお引き継がれた職員は非公務員となるが、3年間は現給保障、その他退職手当算定期間の引継ぎ、地方公務員等共済組合法の適用等の処遇は維持される。法人の給料表等については、労使交渉で決定される。

赤字補てんは限界に近い…

病院の赤字補てんが各課の予算不用額を上回ると、財政調整基金が取り崩される。市の貯金である財政調整基金は、新病棟建設が始まった2012年度に9.6億円だったが、2017年度には3.6億円に減る見込み。災害等緊急な予算対応に備える必要があるため、現状は限界に近付いている。予算編成にもこれまで以上の影響が予測される。

私は三月定例会の一般質問の冒頭で、次のように述べました。

この機をいかし、優しく信頼される市立中央病院になって欲しい

病院の赤字補てんが市の限界に迫る中でも、市長は「産みの苦しみだ」と病院職員自身の奮起を待ってきませんでした。新病棟建設後増員されるはずだった常勤医師派遣が思うに任せず、さらに四月からは関連病院協定が更新されず医師派遣が約束されない見通しの中で、佐藤院長は「市立中央病院を守るために腹を固めた」と、病院の独法化を提案しています。

身近な市立中央病院に、市民は優しく信頼される病院になって欲しいと願っています。十数人の会合で病院のことを切り出すと、信頼の声とともに、期待を裏切られた体験が語る出されます。術後の結果が受け入れがたいことはありませんが、それでも日頃の親身な対応が隙間を埋めるものです。改革の方向性は、昨年のかがり火まつりに中央病院の医師達がオリジナルの桃太郎劇を披露してくれたことに示されています。医師が自ら地域に顔を出すこと、地域を知り、市民のくらしに興味をもつ医師を育成していくこと、そこに親身な医療、市民との信頼を深める病院のあり様が見えてきます。医師が自ら地

私もこの機をいかし、優しく信頼される病院へと改革を進めるべきだと考えます。